

興福寺創建1300年記念

国宝 阿修羅展

The National Treasure ASHURA
and Masterpieces from Kohfukuji

[出品目録]

2009年7月14日(火)～9月27日(日)
九州国立博物館・3階特別展示室

主催：九州国立博物館・福岡県、法相宗大本山興福寺、朝日新聞社、九州朝日放送
後援：文化庁、平城遷都1300年記念事業協会、(財)九州国立博物館振興財団、福岡市、北九州市、太宰府市、福岡県教育委員会、福岡・北九州両市各教育委員会、長崎文化放送、大分朝日放送、熊本朝日放送、鹿児島放送、山口朝日放送、沖縄タイムス社、福岡商工会議所、太宰府市商工会、太宰府観光協会、NEXCO西日本九州支社、(社)日本自動車連盟福岡支部、福岡タクシー協会、福岡市ホテル旅館協会、朝日カルチャーセンター
特別協賛：JAバンク

協賛：竹中工務店、三菱商事、TOPPAN、JR九州

特別協力：SONY、太宰府天満宮

協力：ニッセイ同和損害保険、朝日放送、朝日学生新聞社

- ・作品番号は会場内の番号及び図録の番号と一致しますが、展示の順序とは必ずしも一致しません。
- ・欠番の作品は出品されません。
- ・都合により、展示作品及び員数を変更する場合があります。
- ・指定記号●は国宝、◎は重要文化財を示します。

【展覧会をご観覧いただくにあたって】 会期中は大変な混雑が予想されます。順路誘導にしたがってのご観覧をお願いいたします。再入場はできません。

No	指定 作品名称	作者等	員数	時代	世紀	所蔵
----	---------	-----	----	----	----	----

第1章 興福寺創建と中金堂鎮壇具

和銅3年(710)の平城遷都にともない、藤原鎌足の子不比等は春日山の麓に興福寺を創建した。この興福寺創建にかかわる遺物として、豪華な中金堂鎮壇具が知られている。

明治7年(1874)と明治17年(1884)に中金堂基壇の須弥壇中から、1400点あまりの遺物が出土した。また、平成13年(2001)の中金堂跡の発掘調査でも、創建時の鎮壇具と考えられる遺物が出土している。これほど大量の鎮壇具が出土するのは稀であり、いずれも優れた工芸品である。その豪華さを実感し、興福寺創建に込められた当時の人々の思いを感じて頂ければ幸いである。

01～38	● 興福寺中金堂鎮壇具	明治7年(1874)発見 興福寺中金堂跡出土				
01	● 瑞花双鳳八花鏡		1面	唐時代	8世紀	東京国立博物館
02	● 草花双蝶八花鏡		1面	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
03	● 金銅唐花文鏡		3口	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
04	● 銀鏡		1口	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
05	● 金銅大盤		1口	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
06	● 銀大盤		1口	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
07	● 響銅盤		2口	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
08	● 銀匙		2本	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
09	● 銀鑷子		1口	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
10	● 金銅唐草文脚付杯		1口	唐時代	8世紀	東京国立博物館
11	● 銀葛形裁文飾金具		1個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
12	● 銀大刀柄頭		1口	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
14	● 水晶念珠		1連	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
15	● 水晶念珠親玉		4個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
16	● 水晶丸玉・水晶面取玉・水晶碁石形玉		94個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館

No	指定 作品名称	作者等	員数	時代	世紀	所蔵
17	● ガラス碁石形玉		1括	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
18	● 琥珀念珠		1連	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
19	● 琥珀丸玉・琥珀面取玉・琥珀碁石形玉		22個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
20	● 瑪瑙念珠		1連	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
21	● 瑪瑙丸玉・瑪瑙碁石形玉・瑪瑙面取玉・瑪瑙念珠玉		14個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
22	● 舍利石		22個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
23	● 黒石玉		100個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
24	● 黒水晶玉		6個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
25	● 青緑石玉		7個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
26	● 水晶柱		2個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
27	● 水晶蓋付筒		1合	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
28	● 水晶六角柱		1個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
29	● 琥珀橢形		1個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
30	● 琥珀六角柱		2個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
31	● 琥珀円柱		2個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
32	● 砂金		1括	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
33	● 金塊		10個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
34	● 延金		8枚	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
35	● 金小玉		5個	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
36	● 銀錠		4枚	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
37	● 和同開珎		134枚	奈良時代	8世紀	東京国立博物館
38	● 開元通宝		1枚	唐時代	8世紀	東京国立博物館
39~42	● 興福寺中金堂鎮壇具 明治17年(1884)発見 興福寺中金堂跡出土					
39	● 銀鍍金唐草文脚付杯残欠		1口	唐時代	8世紀	興福寺
40	● 銀鍍金唐花文碗		2口	奈良時代	8世紀	興福寺
41	● 銀碗		7口	奈良時代	8世紀	興福寺
42	● 水晶丸玉・水晶碁石形玉・水晶念珠玉		10個	奈良時代	8世紀	興福寺
43~47	● 興福寺中金堂鎮壇具 平成13年(2001)発見 興福寺中金堂跡出土					
43	水晶念珠玉		2個	奈良時代	8世紀	興福寺
44	ガラス碁石形玉・ガラス小玉		2個	奈良時代	8世紀	興福寺
45	延金		2枚	奈良時代	8世紀	興福寺
46	砂金		6個	奈良時代	8世紀	興福寺
47	和同開珎		5枚	奈良時代	8世紀	興福寺

No	指定 作品名称	作者等	員数	時代	世紀	所蔵
----	---------	-----	----	----	----	----

第2章 国宝 阿修羅とその世界

八部衆像(No.51～59)・十大弟子像(No.60～65)と華原磬(金鼓、No.49)は、光明皇后が天平6年(734)に亡き母、橘三千代の一周年忌供養のために造ったものである。『金光明最勝王経』という經典には、仏が説法しているときに波羅門が打った金鼓の音は、人々を悟りに導くようであったとある。

天平時代の仏像は、写実的でゆたかな表情が特徴であるが、八部衆像と十大弟子像はそのなかでも特に優れている。これらの像は、脱活乾漆造という、麻布を漆で何層も塗り固める技法で造られる。

49	● 華原磬		1基	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
50	波羅門立像	源三郎作	1軀	安土桃山時代	天正5年(1577)	興福寺
51	● 阿修羅立像(八部衆のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
52	● 沙羯羅立像(八部衆のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
55	● 乾闥婆立像(八部衆のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
56	● 緊那羅立像(八部衆のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
59	● 迦楼羅立像(八部衆のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
60	● 須菩提立像(十大弟子のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
62	● 舍利弗立像(十大弟子のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
63	● 目犍連立像(十大弟子のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺
65	● 富楼那立像(十大弟子のうち)		1軀	奈良時代	天平6年(734)	興福寺

[八部衆]

八部衆は、仏教を守護する「天」で、『金光明最勝王経』や『法華経』などにその名前がでてくる。いずれも、もとはインドの神で、仏教に取り入れられてその守護神となった。一具となるのは中国に伝わったのちである。三面六臂の阿修羅、鳥頭の迦楼羅、一角を生やす緊那羅など、変わった姿で表わされるのも八部衆の特徴である。奈良時代に盛んに造られた。

興福寺の八部衆8軀のうち、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、乾闥婆以外の尊名については明らかではない。

[十大弟子]

釈迦に随った十人の高弟をいう。それぞれ次のように特に優れた能力があった。舍利弗は智恵第一。目犍連は神通第一。大迦葉は頭陀(物事にこだわらない)第一。須菩提は解空(空を解すること)第一。富楼那は説法第一。迦旃延は論議第一。阿那律は天眼(真理を見抜くこと)第一。優婆離は持律(戒律を捧持すること)第一。羅睺羅は密行(戒を微細にたもつこと)第一。阿難は多聞(釈迦の説教を多く聞く)第一。

興福寺には6軀の十大弟子像が現存する。ただし、造られた当初の尊名については明らかではない。

No	指定 作品名称	作者等	員数	時代	世紀	所蔵
----	---------	-----	----	----	----	----

第3章 中金堂再建と仏像

興福寺の中金堂は、平安時代以降7回焼失し、再建を繰り返した。享保2年(1717)の火災後は、仮の金堂が建てられ現在に至っている。興福寺では来年、中金堂の立柱を予定し、作業が進められている。その堂は、創建時の中金堂をできる限り再現しようとするもので、完成後には現在仮金堂に安置されている諸像が移されることになっている。そのうち中尊の釈迦如来坐像(江戸時代)、薬王・薬上菩薩立像(鎌倉時代)を除く、四天王立像(No.66～69)を紹介する。これによって、その壮大な規模をご想像いただきたい。

あわせて治承4年(1180)の兵火による焼失後に再興された西金堂本尊の釈迦如来像の仏頭、仏手、化仏、飛天を紹介する。

66	◎ 持国天立像(四天王のうち)	康慶作	1軀	鎌倉時代	文治5年(1189)	興福寺
67	◎ 増長天立像(四天王のうち)	康慶作	1軀	鎌倉時代	文治5年(1189)	興福寺
68	◎ 広目天立像(四天王のうち)	康慶作	1軀	鎌倉時代	文治5年(1189)	興福寺
69	◎ 多聞天立像(四天王のうち)	康慶作	1軀	鎌倉時代	文治5年(1189)	興福寺
72	◎ 釈迦如来像頭部	運慶作	1個	鎌倉時代	文治2年(1186)	興福寺
73	◎ 仏手(釈迦如来付属)		左手1個 右手1個	鎌倉時代	12～13世紀	興福寺
74	◎ 化仏(釈迦如来付属)		3軀	鎌倉時代	12～13世紀	興福寺
75	◎ 飛天(釈迦如来付属)		8軀	鎌倉時代	12～13世紀	興福寺

第4章 バーチャルリアリティ映像「よみがえる興福寺中金堂」「阿修羅像」

参考 出品	中金堂再現模型		1基	平成時代		興福寺
----------	---------	--	----	------	--	-----

● 3階特別展示室

